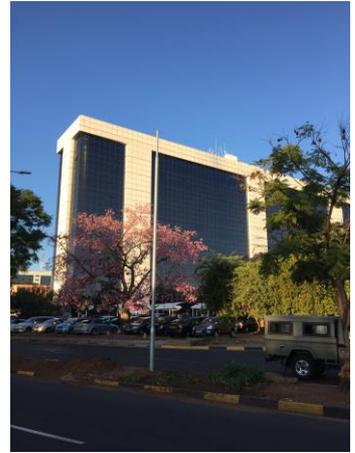


コンピュータ技術 ハボロネ 平成 26 年度 4 次隊

2015 年 3 月にボツワナに赴任し、同年 5 月に教育省の教師訓練開発局に着任しました。この派遣先への JICA ボランティアは、私で四代目になります。主な要請内容は、前任の方々が計画・開発されたデータベース・システム等の管理・機能追加でしたが、着任してすぐに、教員養成カレッジの学生情報データベース・システムを開発するプロジェクトに入れられ、カレッジの IT 担当職員たちにシステム開発を教えたりしていました。



職場のこと

職場は、首都ハボロネの「官庁街」にひときわ高くそびえている 2 つの白いビルの 1 つです。周りの建物のほとんどが平屋か高くても 3 階建てなのでとても高く見えますが、これで 10 階建です。エレベータは 4 基ありますが、いつも 1 つか 2 つは止まっていて、全部止まっていることもしょっちゅうあります。こっちの人たちは若いうちはとてもスリムなのですが、年を取るに連れて（特に女性は）水平全方向にどんどん大きくなっていくので、エレベータが止まっていたりすると、みなさん、階段一つでも絶望的な顔でじわじわと昇り降りしています。



毎年 6 月には「公務員週間」というのがあって、ボツワナ全土全省庁対抗で様々なイベントがあります。芸術分野では合唱、詩の朗読、伝統的ダンス、スポーツ分野では陸上競技などです。例えば合唱は、毎年違う課題曲があり、本番では各グループがそれぞれ鮮やかな衣装をあつらえて、練習の成果を競います。なにしろ「全省庁対抗」ですから、その練習は通常業務並に優先されるようで、本番が近づくとメンバーの人たちは晴れやかに「これから練習行ってくる」と早退していました。

“Mr./Miss Public Servant”（ミス／ミスター公務員）の選出も重要なイベントです。各省を代表する「ミス〇〇省」「ミスター〇〇省」が、ダンス、フォーマル・ファッション、スピーチを競います。みんなとても華やかで、ずっと観ていると、目の前にいる人達が「公務員」だということを忘れそうです。日本でイメージする「公務員」とは、善かれ悪しかれ、イメージが全然違いますね。



日々の暮らしのこと

私の配属先のほとんどの人は、長年公務員をやってきたマダムやおじさんたちで、ボツワナ人らしく人情味溢れる人たちです。要請内容に直接関係のない職場の人たちには、私がどこから来たのかにはあまり興味がないようですが（たぶん、中国、あるいは、中国の一部の「じゃぱん」から来た、と思ってるっぽい）、ともあれ、遠いアジアから来て言葉も不自由でずっと一人で座っている私を不憫に思ってくれるのか、いろいろと親切にしてくれます。同僚と 3 人でシェアしているオフィスには、用もないのにみんなどんどん入ってきて、「元気ー？」「週末はどうだったー？」「私、マパキワ（パン）売ってるんだけど買わない？」「あっちのオフィスに魚売りが来てるわよ」「私の写真撮って」等々、声をかけてくれます。

PCの前に一日中座っていると、「どうもコンピュータに詳しいらしい」→「電気が通っているものはなんでも扱えるらしい」という勝手な解釈が横行し、いろいろな人が、深刻な顔をして「お前の助けが必要だ」と呼びにきます。行ってみると、PCだったらスプレッドシートのデータをソートしてくれとかこの列の数字を全部足してくれとか、会議室だったらプロジェクタが映らないから直してくれ、とかはよくあることです。その他にも、例えば以下のような事案がありました。

- 「プリンタが印刷を拒否するんだ」→ YouTubeの動画（「鶏小屋の建て方」）を印刷しようとしていた
- 「この文書のここだけを修正したいのにできない」→ ファイルがPDFだった
- 「メールに添付されてきたワード文書が編集できない」→ ブラウザのプレビュー画面で編集しようとしていた
- 「あなたの技術が必要なの」→ 政府公式外交文書（MS-Word）の各ページに飾り枠を入れて欲しいと言われた
- 「ラジオ壊れたから直して」→ 筐体が真っ二つに割れて配線の切れ端が外に出ていた（無理です）
- 「日本から中古のiPhoneを買ってきてくれ」→ （できません）

私もこれまでやったことの無いヘルプが多く、インターネットで調べながらできる限りのことをするのですが、それで相手が満足する結果になったら、みんな、本当に素敵な笑顔で「ありがとう」と言ってくれます。ハイタッチやハグがつくこともあります。うまく直せなかったときには、「いいよ、あなたは精一杯やってくれたわ」と慰めてくれます。どちらの場合にも、終わってからなんとなく、自分の当初の要請内容ってどんなんだっけなとぼんやり考えたりもします。

活動のこと

そう、四代目ボランティアとしての私の活動の主目的は、技術移転です。これまでのボランティアだけで開発してきたシステムを、現地の人がメンテナンスし、必要があればプログラムに手をを入れて機能強化できるようになること。そして、新しいシステムを開発するときにはどういう作業が必要かを理解できるようになることです。

ただ、技術移転対象者のIT担当職員たちは、日々の（上記の事案のような）業務や会議に忙しく、なかなかまとまった時間が取れないようでした。それに、ネットワークやPC設定には詳しくてもプログラムは遠い昔に学校でちょっとやっただけだったりするので、いきなりシステム開発しろと言われてもなかなか手が出ないようで、結局うまく技術移転はできませんでした。

システム自体も、現場の職員たちにとっては、使い慣れないPCを使って、面倒なデータ入力をやって、それでも自分たちに直接どういう役に立つのか実感できないことが多いので、自然と興味が離れていってしまうようでした。時々たいへんなこと（すごく上の人から「ボツワナには今、何人大学生がいるんだ？」と聞かれるとか）は起こるけど、それ以外は今までどおりの手作業で間に合うし、子どもの学校のことや親戚の家庭問題のことでいつも忙しいので、余計なことをやる時間はありません。

そうやって使われなくなっているシステムのメンテナンスを一人でもちままとやりながら、楽しそうに大声で歌ったり笑ったりしている同僚たちを横目で見ていると、結局、人生楽しめればそれが一番なのかなとも思ったりします。

最後の写真は、ボツワナ全土の統一学力テストで最優秀になったハボロネ市内の中学校の生徒たちが、教育省の前にみんなでやってきて歌い踊っているところです。みんな本当に嬉しそうで、楽しそうでした。

